

昨年11月22日に開催された北星学園余市高等学校開校50周年記念式典の懇親会で、北星余市高校の創設に関わるスピーチをされた初代教頭馬場達先生（後に校長）のお話は多くの参加者の感動を呼びました。創設当時の詳しい事情はこれまでほとんど詳しくは語られる事がなかったので、ご本人にお願いし、特別号外（No.2）として掲載させていただく事にしました。

北星余市高創設の教育理念

馬場 達

北星余市の歩みについては深谷先生、佐々木先生等から何度もお聞きになられていると思いますので、私は創立時どんな考えをもって教育活動を始めたかに絞ってお話をさせていただきます。

初代校長として山崎金次郎氏が自ら希望を出されていた。しかし彼は男子校校長と余市高校長を兼務して1日おきに両校を行き来するという変則勤務だったので、その校長を支え、校長不在の時はその代わりが出来る人物をと、当時の時任理事長も山崎校長も、北星女子高の大物教諭を候補者に上げて、余市に行かないかと懸命に呼びかけました。しかし女子高での音楽教育に新しい試みを考えているとか、家族も反対しているとかの理由で、女子高に骨をうずめたいと断ってきた。それでも一人「行って見ようか」という先生がいた。しかし仮校舎を見に行くと、「話には聞いていたがこれは余りにもひどい、新校舎の見通しもあやふやだ、生徒が集まるかどうか分からない、持ったとしても2、3年だろう。私の家庭は子どももまだ小さいし生活が心配だ。」と断ってきた。

山崎校長が連れて行きたかった男子校の教師も結局男子校に残る、または道内の他の私学を選ぶなどのため、仕方なく、まったく仕方なく、山崎校長は余市行きを希望した私を連れて余市高校を始める事になりました。どういう学校にしていくのか二人で2時間余り話し合い、大きく分けて2点で意見の一致を見ました。

- 1) キリスト教教育を土台にすえるが、それが単なる看板ではなく、また公立高校の補完的役割でもなく、本当の愛の教育を実践しよう。子どもたちをとことん愛し、苦しみを共にし、それを乗り越え、喜びを分かち合えるような生徒との関係をつくろう、また生徒同士が一人一人が神様に限りなく愛されている事を知り、生徒同士お互いに愛し合って歩むような学校をつくろう。
- 2) 山崎校長は男子校時代、謹慎>長期停学>退学処分の繰り返しに嫌

気が指していたので、処罰のない無処罰の学校をつくろう。事件が起きたら、生徒自らの手で解決させていく方向に歩みだそう。そのためには、教科指導にも力を入れるが、生活指導（HR,生徒会活動等）も大切に育てよう。当面「謹慎命令書」、「退学届け」は作らないでおこう。

この方針は、その後いろいろな試練に会うが、その精神は引き継がれて行ったと信じたい。なお無処罰主義については、当時自由の学園として全国にその名をとどろかせていた深川西高にあった「秩序維持委員会」に学ぶため訪問させていただいた。男子校在職時も余市高でも、生徒会の役員と共に、ある時は教職員と共に見学させていただいた。

第2代目の校長として赴任された吉川泰夫校長については、当時高校生活指導研究会で共に学習した深川西高のメンバーから、「先生は、まだ息子さんが深川西高の生徒の時の父母会で、学校は当時の北海道新聞などでも報じられたとおり「偏向教育」をしているのではないかという多くの父母の批判に対して、ただ一人「うちの子供は素晴らしい教育を受けている、決して偏向教育などではない。」と反論された方だと聞かされた。「是非余市で大切に受け入れて欲しい」との心からの依頼も受けた。

この創設に当たっての教育理念が、後に全国の教育に大きな影響を与えた「仲間、友情、団結」のスローガンによって知られる生徒たちの「自主規律運動」の土台を準備したものであったと考えている。（文責 安達）

附記 本文掲載に当たって ビバハウス 安達 尚男

- 1) この文章を作成中、ビバハウス付設のフリースクール・ビバスコレ校長、元公立小中教員の近藤芳二先生より、在職中、たびたび教師研修会などで馬場達校長の北星余市高校の教育に関する講演を聴き、それまで多くの教員は「生活指導」に携わる事を軽視してきたが、講演後自発的に取り組む者が増えたと語って下さった。
- 2) 文中にある北海道深川西高等学校の教育については、昨年出版された、森谷長能著「北海道深川西高校「あゆみ会事件」～真実と平和な世界を求めて～」(文理社)に詳しい。
- 3) なおこの馬場先生のスピーチ終了後、同席していた北星学園理事長大山綱夫先生は、即座に「感動しました。是非スピーチの文章のコピーをいただきたい」と馬場先生にお願いをされていました。

大山理事長は北星学園（前身はサラールC スミス女学校）の創設者の研究者としても知られ、今回の北星学園大学の元朝日新聞記者植村隆氏の継続雇用を、学園に対するあらゆる脅迫にも屈せず、学園

創設の精神を守り抜くため、大英断をもって最終決定されました。